

第55回
記念

姫路お城まつり協賛

姫路城

新

TAKIGI NOU

at Himeji Castle Sannomaru Square

た
き
ぎ
の
う

能

《番組》

能

胡

蝶

浦田 保浩
福王 知登

狂言

狐

塚

茂山 千五郎

能

天

鼓

上田 貴弘
江崎 欽次朗

火入れ式

日時 2026年 5月22日(金) 午後6時00分始

午後5時00分～親子教室発表会を開催

場所 姫路城 三の丸広場 (特設舞台)

雨天の場合は、姫路市市民会館にて開催。*

※席数が限られている為、賛助ご招待券をお持ちの方からの優先入場となります。

ホームページ

<http://himeji-takiginou.org/>

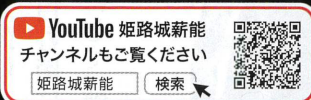
入場無料*

※広告協賛席の後方に無料席を設けております。
※協賛席をご希望の場合、当日協賛も受付けております。

主催 姫路新能奉賛会

協賛 江崎福王会・姫路能楽会・上田観正会・大倉華月会

後援 お城まつり奉賛会・兵庫県・姫路市・姫路市教育委員会・姫路商工会議所・
公益財団法人姫路市文化国際交流財団・姫路信用金庫ひめしん文化会



当公演は能の鑑賞をサポートする
「能サボ」に対応しています



ご案内 JR姫路駅・山陽電鉄姫路駅から徒歩15分。

■題字：清元秀泰姫路市長 揮毫

かんざりゅうのう
●観世流能「胡蝶」
こちよう

大和の国(奈良県)の吉野の山奥に住む僧は、早春の都を訪ねます。一条大宮に着いた僧が、古い宮のなかに、見事に咲いた色違いの梅を見つけ、眺めていると、女が声をかけてきます。不審に思った僧が、宮の謂れと女の名を問いただします。女は宮の謂れを説明しますが、自分の名は明かそうとしません。僧が重ねて問いかけると、女は、梅の花に縁のない身を嘆く蝶であると明かし、僧に有難いお経を読んでもらい、成仏したいという望みを語ります。そして、夜半に夢の中に現れると言いついて、夕空へ消えていきました。

僧が梅花の下で一夜の宿を取り、お経を読んで寝ると、胡蝶の精霊が現れます。梅の花と出あった喜びを表して舞い、歌舞の菩薩の舞い姿を見せて後、明け方の空へ、羽を打ち交わしながら消えていきます。



能「胡蝶」

おおくろりゅうのうげん
●大蔵流狂言「狐塚」
きつねづか

秋も深まり狐塚と称する田にも稲がたわわに実っています。主人から鳥に田を荒らされぬよう、見張り番を命じられ、狐塚の田へやってきた太郎冠者と次郎冠者。二人が鳴子を振って群がる鳥を追っているところへ、主人が酒を持って慰労に来ます。

ところが付近に悪い狐が出ると聞いてきた二人は、主人を狐の化身と思ひ込み、いぶした青松葉を鼻先に突きつけて正体を現せと迫



狂言「狐塚」

り、さらに鳴子縄で縛り上げます。しかしそれが真の主人と分かり逃げていきます。日本の原風景に懐かしさを感じずにはられない、秋を代表する演目です。

かんざりゅうのう
●観世流能「天鼓」
てんこ

中国後漢の時代、王伯・王母という夫婦の子ども「天鼓」は、王母が、天から鼓が降つて胎内に宿するという夢を見て授かりました。するとその後、本当に妙な音色をたてる鼓が天から降つてきました。天鼓はこの鼓とともに育ちます。

その鼓の発する音は、大変に素晴らしく、人々を感動させ悦びを導くものでした。そのうわさが皇帝の耳に入り、鼓を召しだすようにとの勅令がくだされます。

ところが、天鼓はこれに応じずに鼓を持つて隠れてしまいます。しかし、あえなく捕らえられ、呂水に沈められてしまいました。

鼓は、宮殿に運ばれてさまざまな楽師が試みに打ちますが、主の天鼓を失ったためか、全く音を発しません。誰が打つても鳴らないため、皇帝は、天鼓の父・王伯に鼓を打たせよと、勅使を送つて召しだします。

王伯は、鼓が鳴らなければ自分

も殺されるのを覚悟で宮殿に上がり、わが子への思いを胸に鼓を打ちます。すると、この世のものとは思われない音色が鳴り響きました。感動した皇帝は、王伯に褒美を与えて帰し、天鼓の冥福を祈るため、呂水のほとりで管弦講をおこなうことにしました。講の当日、皇帝が呂水に御幸すると、天鼓の霊が現れ、懐かしい鼓を打ち、管弦に合せて、ひとしきり喜びの舞を舞います。樂しげに舞う天鼓は、ほのぼのと夜が明け、空も白む頃に現れ、夢ともつかないようにして、消えていくのでした。



能「天鼓」